

基本CG16枚+差分+α計109枚+文字なしver



PUNISH 2

~相◎千鶴の罪~







数日前・・・私は複数の男達にレイプされた。

ラブホテルに連れ込まれ裸にされた挙句何度も何度も犯され続けた。

その日以前にも幾度となくセックスを強要されてきたけど

男達の行為は日に日に乱暴に、暴力的にエスカレートしていく。



こんなことがいつまで続くのだろうか・・・





抗えるなら、逃げ出せるならそうしたい…  
でも、そうするとあの男達は私の家族にも危害を及ぼしかねない。  
それだけは何としてでも避けたい。

だからこの事は私の中だけに留めておいて  
男達が飽きるまで私が耐えるしかない。



少しした後、私の携帯にメールが届いた。  
あの男からだ…。  
私は恐る恐るメールの本文を見てみる。

「今日21時に○○公園で待ち合わせしよう。  
分かってると思うが、もし来なかったり妙なマネをしたりすると  
お前もお前の家族の人生も終わりにしてやる。」

脅迫混じりの呼び出しのメールに恐怖心と不安感を煽られる。  
それでも私はただ男のいいなりになるしかなかった…。



21時〇〇公園。。。指定通りに来たけど私以外誰もいない。  
いつものことながら男達はまた遅れてくるようだった。  
もういつそのこと来なければいいのに。。。心底そう思う。



私はいつもと違う待ち合わせ場所に少し違和感を覚えていた。  
今日は別のラブホテルに行くのだろうか？  
それとも……

そんなことを考えていると向こうからガラの悪い男達が  
私の方に向かって歩いてくる。  
ああ……ついに来てしまった……



「やあ！千鶴ちゃんお待ちませう」

「ははは！この前あんな目に遭ったのによく来れたな！」

男達はニヤニヤしながら私の周りを取り囲む。  
私は身を縮めて怯えることしか出来なかった。

「本当は俺達にヤラレて嬉しいんだろ？なあ！」

「何とか言えよ！この肉便器が！」

「くっ……」

好き放題言われても何も言い返せない。

悔しい……



「それじゃあここでボーツと突っ立ってんのもなんだから服を脱いでもらおうか」

「え……!？」

私は一瞬自分の耳を疑った。

「今ここで服脱いで全裸になれつつってんだよ!早く脱げや!」

「そ、そんなこと出来るわけないでしょう!」

「こんな所で裸になるなんて……!」

男達の無茶な要求に血の気が引き

思わず強い拒否反応を示してしまふ。

「それにもし誰かに見られでもしたら……」

「そんなの知ったこっちゃねーよ!」

「肉便器の分際で俺達の言うことが聞けねーってのか?」

酷い……この男達は どうしてこんなことを平気でやらせられるの?」

私の意思なんてお構いなしに……」



「どうやら千鶴ちゃんはまだ自分の置かれた立場が  
分かってないようだなあ」

「っ……!!」

いや、分かっている……私に拒否権なんて無いことは。  
それでもこの要求は無茶苦茶すぎてどうしても気が引けてしまう。



「千鶴ちゃんの大事な家族が  
俺達の遊び道具になっても良いのかな？」

「やめて！私のごときは好きにしていから  
家族には手を出さないで！」

「ははっ！だったらさっさと脱いで裸を晒すんだな！」  
「……わ……分かったわ……」

悍ましいほど卑怯で狡猾……  
男達の前では私はあまりにも無力だった。



「はははっ！千鶴ちゃんのストリップショーだ！  
お前らよく見とけよ！」

「ちゃんとビデオカメラで撮っというてやるからな！」  
「くっ……」

男達に煽られながら私は震えた手で  
着ているTシャツに手をかける。





Tシャツを脱ぎ、上半身はブラを着けているだけになる。  
この時点でかなり恥ずかしい。



「どうした！焦らしないで早く脱げよ！」  
「脱がねーんだったら服切り裂いてでも裸にひん剥いてやるぞ！」  
躊躇う私に男は容赦なく罵声を浴びせる。



男達に言われるまま次はズボンを下ろす。

肌の露出が増えるにつれ羞恥心が増し  
心臓の鼓動が早くなる。





あと身に付けているのは下着だけ。  
これ以上脱ぐのはもう……  
羞恥心が私の手を躊躇わせる。

「早くしろや！みんな待ってんだぞ！」  
「肉便器が恥ずかしがってんじゃねーぞ！」  
「ううう……」

酷く罵られ心がズキズキと痛む。  
辛い……





ブラを外し胸が完全に露わになる。

イヤ……恥ずかしい……

「おっ？乳首立ってんじゃないか！

興奮してんのかこのマゾ女が！ぎゃははははっ！」

「オラっ！最後の一枚だ！脱げ！」

「うう……ハア……ハア……」

顔が熱くなり息も荒くなってきた。

恥辱に耐えながら私はパンツを下す。





着ているものを全て脱ぎ、私はついに裸になってしまった。

夜風が肌を撫で全身がスーッスーする。

そして顔は恥ずかしさのあまり熱を帯び冷や汗が流れる。

「ビュ〜♪やっぱりエロい体してんな〜千鶴ちゃんは!」

「乳首もマン毛も丸見えて恥ずかしいね〜」

「イヤ…見ないで…」

こんな屋外で大勢の男達に裸を見られ晒し者にされるなんて…





「こんな所で裸になるなんて、これじゃあ只の痴女だな！」  
「千鶴ちゃんはお下変態だから裸晒して興奮してんだろ？なあ！」  
「イ……イヤ……こんなこと……」

私は弱々しく声を震わせながら悔し涙を流す。  
次は何を要求されるのか……ひたすら不安が募る。





「次は俺達が見てる前でオナニーしてもらおうか」  
「え……!?!」

「千鶴ちゃんには俺達に絶対服従だということを示してもらわないとなあ!」

男達は命令に従わせることで私に主従関係を分からせようとしている。

「そ……それならせめてどこか別の場所で……」

「こんな所でするなんて……無理よ……」

「はあ? 駄目に決まってるだろうが!! 肉便器のクセに俺達に意見してんじゃねえ!」

「それとも代わりにお前の家族にやってもらおうか? ああ?」

「やめて……! するから……ここでするから許して……」



「オラァ！自分でマンコ広げろ！俺達にもよく見えるようになる！」  
私は男に従い自分のアソコを指で広げる。  
無防備に剥き出しになった膣が夜風に晒され  
少し冷やややかさを感じる。

ヒク...

ヒク...

ヒク...

「マンコの奥まで撮っててやるからもっと良く見せろ！」  
「おいおい！マンコ濡れてんじやねーか！ヤラシイ女だぜ！」  
「俺達に苛められて興奮してんだろ？このマゾ女が！」  
「う……くっ……」  
晒し者にされたうえに酷い言葉を浴びせられ  
私の自尊心が傷つけられる。



「おい！普段やってるみたいにおナニーしてみろや！  
ちゃんと見ててやっからよお！」

「く…わ、分かったわ…」  
羞恥心に塗れながらも私は自分のクリトリスを  
ゆっくり弄り始める。

ん…  
SR…

ハア…

ん…

クリトリス…

「ん…ハア…ハア…ハア…んっ…」  
徐々に息が荒くなり体も熱くなってきた。  
クリトリスは次第に膨らみ、更に敏感になる。  
「ハア…ハア…ん…ん…んっ…」

ああ、こんな状況でオナニーしなくちゃいけないなんて…



アソコが十分に濡れてきたところで今度は膣内に  
2本の指を入れてゆっくりにかき混ぜる。

「んっ……ハア……ハア……ん……んっ……」

「はははっ！嫌がってた割に

気持ち良さそうに感じてんじゃねーか！」

んっ……

ムア……

ムア……  
あ……

ちゅん……

ちゅん……

「全くどうしようもない変態女だな！」

「くっ……ハア……ハア……ん……ん……あ……」

罵倒されても悔しさを抑えながらオナニーを続ける。

反抗することは決して許されない……



体は徐々に汗ばみ息が荒くなる。

敏感になった膣内を私は更に激しくかき混ぜる。

「んんっ……ハア……ハア……あっ……ん……ハア……ハア……ハア……」

ハア

んんっ……

んんっ……

んんっ……

ハア

んんっ……

んんっ……

んんっ……

クチュ  
クチュ

ポク

ポク

ズチュ

男達はニヤニヤと私がオナニーする姿を見ている。  
そんな男達の態度が私を余計に惨めに追い込む。  
「あっ……！ハア……ハア……んんっ……ハア……ハア……ハア……あっ……」  
ああ、このままイってしまいたい……



そして私は絶頂を迎えた。

「ああっ……い……イクっ……んんっ……ああっ……!!」  
いった瞬間、体はビクビクと痙攣し愛液が溢れ出す。

お女……!!

どろっ

びしょ

ぷるん

「おい! マジでイキやがったぞ、この女!」

「ははは! この状況でオナニーしてイクなんて  
コイツは真性のマゾ女だな!」

「ハア……ハア……ハア……イヤ……こんな……」

自己嫌悪と屈辱に苛まれ涙が溢れてきた……



「オラー！立てー！」

「い…痛い…！」

男達は私の両腕を掴み乱暴に立たせる。

「何…どうするの…！」

「オナニーだけじゃ物足りねーだろうから

もっとな気持ち良くしてやるよ！」

「え…！」

ム

ム…

男達は不敵に笑い、得体のしれない不安感が私を襲う。



「ぎやっ……!!」

突然、背後から1人の男が私の胸を鷲掴みにした。そして胸を乱暴に揉まれ乳首を強くつねられる。

「んっ……イヤ……やめ……て……ああっ……!!」

「動くなやコラあ!!」

「ああっ……!ハア……ハア……痛い……あつ……」

私には男の手を振り払うことさえ出来ず、ただされるがままになるしかなかった。

ハア  
ハア

ん……

お  
ん





「オラァ！マンコも弄ってやるぜ！」

男の太い指が私のアソコに強引にねじ込まれる。

「んんん…ああつ…!!!」

「マンコめちやくちや濡れてんじやねーか！」

「気持ちいいんだろ？なああ！」

「ハァ…ハァ…そ…そんなこと…ない…ああ…！」

男はその太い指で私の膣内を乱暴にかき回す。

ああ…

ハァ…ハァ…

んんん

ビクビク

クチュ

クチュ





男は唐突に私の唇を無理矢理奪う。

「ちゅっ……んっ……んん……」

「オイ！ちゃんと口開けて舌出せや！」

固く閉ざした私の唇は強引に抉じ開けられ

口の中に男の舌が入ってくる。

「んんっ……んむう……ちゅっ……ハア……んっ……ちゅっ……」

チュッ

チュッ

ちゅ

ん

ん

舌と舌を絡められ、お互いの唾液が  
口の中で混ざり合う。

あまりにも強引なディープキス……  
屈辱感と悲しみが溢れてくる。



ようやく唇を解放されると私のアソコを  
掻き混ぜていた男の指が更に激しく動き出す。

「ああっ……！ハア……ハア……あんっ……ハア……ハア……」

「オラ！もつと喘げ！」

「あんっ……あっ……！ハア、ハア、ハア……イヤあ……！」

乱暴な愛撫による胸とアソコの痛みと  
強制的な快楽に私の体は敏感に反応する。





「あんっ……ああっ……!! イク……あぁ……!!」  
男達に愛撫され続け私の体はイク寸前までできている。

「オラー! イけ! イけ!!」

「ああっ……んっ……! ダメ……あぁっ……!!」

私は体をガクガクと痙攣させながら遂にイってしまった。

「ははっ! イキやがったぜ! メスブタが!

こんなにもン汁溢れ出させやがってよお!

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

あぁっ……!!

ぷしゃっ

びん

びん

頭はしばらくボーっとし溢れ出した愛液は私の内腿を伝い落ちる。もう立っているのも辛い。



「おいおい！前戯だけでへばってんじゃねーよ！  
まだまだだこれからだぞー！分かってんのかコラ!!」  
「きゃああっ!!」  
男は私の髪を掴み乱暴に地面に座らせる。  
「い…痛い…離して…」

「オラー！チンポしゃぶれ！」  
私の目の前に突き出されたペニス…  
それはとてつもなく大きく大きい。

グリーッ

ハア…

ハアハア

「おい！俺も混ぜろや！」  
「ああっ…!!」

もう1人の男が私の太腿を踏みつけ  
同じく大きいペニスを私に向ける。



「ハア…ハア…ハア…ハア…痛…い…」

「さっさと啜えろ！オラっ！」

私は恐る恐る口を開けペニスを啜えた。

「んむう…んん…」

大きすぎて口に入れるだけで精二杯…

んん  
んん

ちゅぽ  
ちゅぽ

「おい！もつとちやんと舌使ってしゃぶれや！ヤル気あんのか？」  
「んん…んん…んん…んむう…んんっ…んん…」

私は男の機嫌を損ねないように頭を動かしながら  
必死に口の中でペニスを舐める。







「オラー！出すぞ！」  
ドプツッ！ドプツッ！ビュル…ドク…ドク…  
喉の奥にまでペニスを突っ込まれたまま激しく射精された。  
「んぐっ?!…んふっ…んんっ!!おお…ぶふっ…んおお…」  
「全部飲め！絶対に零すなよ!!」

だっ  
だっ

男は私の頭を押さえつけ口の中に精子を流し込む。  
独特の生臭い匂いとしょっぱさは舌に纏わりつき  
濃い精液が喉に絡んで何度も咽せる。  
息も制限されていてとても苦しい。



男はしばらく私を苦しめた後ようやくペニスを抜いてくれた。  
「おえっ!!!ケホッ...ハア...ハア...うえっ...ゲホッ...ゲホッ...  
ハア...ハア...ハア...ハア...」  
飲んでしまった大量の精子がお腹の中に溜まって気持ち悪い...  
そして飲みきれなくて吐き出した精子は唾液とともに  
私の胸やお腹に零れ落ち汚れていく。

ケホッ  
ケホッ  
うう...  
おえっ

ポタポタ...

「なに吐き出してんだ!!全部飲めつつただらろうが!!」

「きやつ!!...ああつ...」

男の機嫌を損ねてしまい髪を思いっきり引っ張り回される。

「次はこっちだ!しゃぶれホラ!!」

「んぐっ...ハア...ハア...うう...」



「来い！」  
「ああっ……ううっ……ハア……ハア……痛い……きやあっ!!」  
男達は私の体を強引に引きずり回し芝生へ突き飛ばす。  
「あっ……ん……イヤっ……ハア……ハア……ああっ……」  
「暴れんな!大人しくしろコラあ!!」

ハア  
ハア

ドキ

ドキ

手足をバタつかせ抵抗する私を男達は力ずくで押さえつける。  
しかも股を開きアソコが丸見えになった恥ずかしい格好で……  
「ハア……ハア……イヤ……イヤ……やめて……」  
私は逃げることも出来ず恐怖心が込み上げてくる。



「はぁ……んっ……」  
男達は無造作に私の胸を揉み、乳首を荒っぽく弄る。  
「お前もマンコにチンポ突っ込まれたくてウズウズしてんだろ？」  
「これからたっぷり犯してやるから覚悟しろよ！」  
「んっ……ハア……ハア……そんな……あっ……あ……」

敏感な胸と乳首を刺激され自分の意思に反して  
体が勝手に反応してしまう。





「先ずはオレから犯ってやるぜ！」  
男はそう言いながらズボンを下ろしペニスを  
私のアソコの前に突き出す。

おおっ  
ハア

イッ！

ハア  
ハア...

ヒキ  
ヒキ

ヒキ  
ヒキ



「こいつがレイプされて泣き叫ぶ姿を  
しっかり撮影しといてやるから存分に犯してやれ！」  
「ハア...ハア...イヤ...イヤ...待って...お願い...！」



私の願いは全く聞き入れられず一方的に。。。そして強引にペニスを挿じ込まれる。

「ああっ。。。ん。。。ん。。。っはあ！ハア。。。ハア。。。ハア。。。ハア。。。」

ん。。。

ん。。。ん。。。

ああ。。。

ハア

ん。。。

ズット

男のペニスはあまりにも大きく、膣内に強い圧迫感を感じる。ただ挿入されただけでもキツくて痛い。





男は嫌がる私を尻目に容赦なく腰を動かし始める。

「あっ……ハア……ハア……ああ……あ……ハア……ハア……ハア……んんっ！」  
アソコを突かれるたびに苦痛と快楽が入り混じったような  
感覚が私の体を襲う。

あんっ  
はあち

カチ

カチ



イヤッ!!

はあち

ヒッ  
ヒッ  
ヒッ

じゅぶ

ぬぶ

ピ

ピ

ズッ

パニ

「へへっ……すげえ締め付けだぜ！」

「あん……あ……あっ……イヤあ……はあっ……あんっ！」

胸と乳首とアソコを同時に責められ体が過敏に反応し  
喘ぎ声も次第に大きくなってきた。



男は更に激しく腰を動かす。

「気持ちいいんだろ？ ああ？ レイプされて興奮してんだろマゾ女が！」

「ああっ…ち…が…ああん！ あん！ あん！ あん！ ああっ！」  
言い返そうとしても喘ぎ声にかき消されて言葉にならない。

「アハハハハ！」

「うおお…出すぞー！」

「ああっ…!! イヤ…あっ…やめ…て…あああっ!!」

必死に男を止めようとするけど無視され私の膣内に射精される。

「オラっ！ ドピュッ！ ドプッ！ ドクッ…ドク…」

「イヤああっ…!!」

勢いよく出された精子は膣奥を刺激し私の体を絶頂へと向かわせた。

ピュッ

ピュッ!

ピュッ



ドクドクと脈打っていたペニスは精子を出し切り  
私のアソコから引き抜かれた。

「んんっ…ああ…っはあ…!ハア…ハア…ハア…ハア…」  
「やっぱ最高だぜ!こいつを無理矢理犯すのはよお!」

ハア…  
ハア…

膣内に射精された精子が私のアソコから

トロリと溢れてきて気持ち悪い。

「うっ…ぐすっ…うっ…うっ…」

私の思考はしばらく虚ろになり

喪失感に苛まれ咽び泣いた。

トロリ…





一度犯されたにも関わらず男達はまだ私の手足を離してくれない。  
もしかしてまだこのまま私を犯すつもりなの……？

「よし！次はオレの番だぜ！」

今度は別の男が私の股の前に腰を下ろす。

「まだまだ犯され足りねーだろ？なああ！」

「ハア……ハア……ま……待って……ハア……もう……辛い……」

ヒア……

い



「はあ？何言ってるんだ肉便器が！俺達全員満足するまで  
終わんねーぞ！」

「ハア……ハア……そんな……」

私はまだまだ終わらないであろう苦痛を予見し絶望する。



心の準備が出来ず恐怖心を抑えられないまま  
再度、私のアソコを貫かれる。

んんん…

ハア

ハア

ハア  
ハア…

ドク

ズズ…

ズズ…



「ん…ああっ…!!ハア…ハア…ハア…ハア…」  
休む間もなく立て続けに犯されるのは本当に辛い…  
それは前回は嫌というほど味わされた。



「オラァ!どうだオレのチンポは!」  
「あつ...ああつ...イヤあ...あんっ...あんっ...」  
アソコを突かれるたびに嗚咽の混ざった喘ぎ声が出てしまう。  
「お前んとこの店の客にも見せてやれよ!このヤラしい姿をよお!  
なんならこの映像をお前の店でばら撒いてやつてもいいんだぜ!」



「ぎやははっ!いいねえ!そしたらお前とのセックス目当てで  
客が増えるかもしれねーぜ!」  
「んぐっ...ううっ...んっ...あつ...!あんっ...!」  
悔しい...私の大事なお店をそんなふうに使われるなんて...  
裸で不様に犯される私を大勢の男達が見下ろして笑いものにする。  
自分がいかに惨めすぎても涙が溢れてくる。

「んぐっ...」



「もつと泣けやオラ！」

「あぁっ！あんっ！あんっ！あんっ！あつ！あつ！ああつ！！」  
私を更に責めるように男のピストン運動が激しさを増し  
苦痛と快楽が私の体に突き抜ける。  
そして……

あぁっ……！！



ピュッ  
ピュッ

ピュッ  
ピュッ

ピュッ  
ピュッ

ピュッ  
ピュッ

「あんっ！あんっ！あぁっ！イイク……あつ……あぁあつっ……！！」  
「うおっ……！ドピュッ！！ピュルッ！ドクッ……ドク……ドク……」

私がイクのとほぼ同時に再び膣内に射精された。  
男たちにとって私なんて只の玩具かのように  
躊躇いなく当然のように中出しされる。



「ふいふたまんねーぜ！」

「ああつ…んっ…ハア…ハア…ハア…」

私の膣内からペニスを引き抜かれ大量の精子が零れ落ちる。

この時すでに私の体と心は疲弊していた。

けれども、それでも男達は私の手足を離さない。

「おい！次はだれがやるよ？」

「次はオレにやらせるや！もう我慢できねーぜ！」

「マジかよ〜じゃあその次はオレな！」

「ハア…ハア…そんな…お願い…待って…ハア…ハア…」

ちよつと…休ませ…て…あ…イヤあ…！」

私はその後も休む間も与えられず立て続けに3回犯された。



「来い！」  
「きやあつ！痛い…イヤあ…！」  
男は私の髪を掴み、近くにあった休憩所まで  
引きずるようにして歩かされた。

「やま…」

「ガッ」

「ザッ」

「ト…」

「動くなコラあ！」  
「ああつ…！やっ…ハア…ハア…」  
裸のまま固い木のテーブルに両手と頭を  
無理矢理押さえつけられて痛い…  
男が身動きが取れない私のお尻を無造作に  
撫でたり揉んだりして弄ぶ。  
「今度は後ろから犯してやるぜ！」  
「ハア…ハア…ハア…やめて…これ以上は…」

「ハア」

「ハア」

「ハア」



男は私の意思なんて無視し強制的にペニスを挿入する。

ズキン...

んんん...

ハア

ズキン

ハア

ハア

「んんっ...! ああ... ああ... ハア... ハア...」

太くて長いペニスは私の膣内の奥深くまで挿れ入れられアソコが裂けてしまいそうなほど強く圧迫している。



男が荒々しく腰を動かす。

「あっ…あんっ! あん…あっ…あっ…あぁ…!」  
アソコを突かれるたびに体がテーブルにすられて痛い。  
でもそんなことは気にも留めず男は腰を振り続ける。

ハアッ  
あぁッ!

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

んん

んん

「あぁっ!…あっ…痛…い…あっ…! あんっ…」  
「お前マゾだからレイプされて悦んでんだろ? あぁ?」  
「ち…違…う…あぁっ…!」  
こんなことをされて悦ぶわけがない。  
ただ苦痛なだけ…

んん



「オラっ！」「あぁっ！……あぁっ！……あぁんっ……！！」

あぁんっ！！

ビリン

ゴク

ゴクゴク……

ゴク

男は最後、私の膣奥にペニスを叩きつけるように  
思いつきり突き、射精した。  
そしてその振動と刺激に体を貫かれ私もイってしまふ。



「んっはあ……ハア……ハア……ハア……」  
精子を出し尽くしたペニスを私のアソコから引き抜かれた。  
私のアソコはまるで掃き溜めのように大量の精子を  
吐き捨てられている。

ゼロオ……

ビク

リア

リア

ビク

リア

リア……

「ふいっ、やっぱ生でやって中出しすんの最高だな！」

「だよな！こんな美人を肉便器にできるなんて役得だぜ！」

「ははっ！こいつとセックスしたけりゃいつでもオレに言えよ！」

「どれだけ犯そうが苛めようが全然構わねーからよお！」

「う……う……そんな……酷い……」

私の意思なんて無視されて一方的に性処理の道具として扱われるだけ……



「なあ、千鶴ちゃん！そういうやこつちの穴は今日まだ犯ってなかったよなあ？」

「えっ……!!」

男が私のお尻の穴を指で広げペニスを押し付ける。

「ハア…ハア…そんな…やめて…」

「そこだけは…」

ぬる…

ぐわわ

んんん…

ドキ

ハア

ハア

ドキ

ドキ

ドキ

「やメテやメテってそればっかりじゃねーか！

たまには自分から『犯してください』とか言えねーの？」

「怖い…もう痛いのはイヤ…ハア…ハア…ハア…ハア…」

「はははっ！この前、尻穴犯された時は泣いて悦んでたじゃねーか！」

私が何を言ってもまともに聞き入れてくれない…

恐怖心に苛まれ心臓の鼓動が早くなる。



メリメリと私のお尻の穴を無理矢理こじ開けるように  
男がペニスを挿じ込む。

「んんっ…あっ…イヤああっ…!!」  
お尻の穴に激痛が走る。  
男のペニスはあまりにも大きすぎて  
お尻の穴が裂けてしまった。

ズブズブ…

下あぁ!!

ピクッ!

「ハア…ハア…ハア…痛い…うう…うう…」

「ははは！良い顔だ！そんな顔を見せられると  
もつと痛めつけてやりたくなるぜ！」

男は嗜虐的な笑みを浮かべながら私に囁く。  
この男は私が苦しむ姿を見て楽しんでる…



「オラあつ!!」

突然始まる男の激しいピストン運動。

私のお尻の穴はペニスとの摩擦で激痛を伴い直腸の中をぐちゃぐちゃに掻き回される。

「ぎゃあっ!あつ!あつ!あつ!あつ!痛い!痛い!痛い!あつ!!」

あま!!

ビウ

ズブ

ズブ  
ズブ

パン

パン

ハッハッ

ビウ

パン

ハッ

ハッ

あ  
あ

イヤ

痛みから逃れようと身をよじっても体を押さえつけられているから身動きが取れない。逃げられない。「ああっ!イヤああっ!お願い!もう許して!」

耐えられないほどの苦痛に私は泣き叫んで必死に懇願する。しかし男は私に痛みを与えるために激しく腰を動かし続ける。



裂けた肛門は更に傷を広げ出血し、腸内はぐちゃぐちゃに掻き回されて不快感を催す。とても苦しい。これじゃまるで拷問……

「あっ！ああっ！イヤあ…助…け…て…ああっ！」

「いいねえ！その苦痛に歪んだ表情！」

ビュッ

ゴッゴッ  
ビュッ

パッ

お大事に！！

ピクッ  
ピクッ

男は更にピストン運動を早める。

「きやああっ！ああっ！あっ！あっ！あんっ！」

「出すぞ！！」ドプツッ！！ドピュッ！ピュルッ！ドク…ドク…

「あああっっっっ！！」

男は私の腸内で射精し、それと同時に私の体はビクンビクンと激しく痙攣しながら絶頂に達してしまった。



「ハア…ハア…ハア…ハア…あ…あ…あ…ハア…ハア…」  
「やつと終わった…」  
『すず…ぬぷっ…』  
「ん…くっ…あ…あ…!」  
お尻の穴からペニスが引き抜かれた瞬間  
痛みで声を漏らす。

あ…あ…

ガッ

ゴロ…

ガッ

ヒア…

ヒア  
ヒア

裂けて流血した肛門がヒリヒリと痛み

流し込まれた大量の精液が腸内に溜まっていて気持ち悪い。

「ははっ!尻穴ガバガバに開いちまってんじやねーか!」

「なあ!次はどっちの穴を犯されたい?マンコか?

それともまた尻穴か?はははっ!」

「ハア…ハア…そんな…イヤ…もうイヤあ…」



私はその後、更に4回犯された。

体位を変え、乳首を噛まれ、クリトリスを抓られ、  
そしてフェラチオをさせられながらアソコを突かれて……

度重なる暴力的なレイプで心と体は消耗しきってしま  
私はぐったりと地面に横たわっていた。

「なあ、そろそろ休憩すつか!」

「だな! とりあえず全員1、2発は犯ったしな!」

休憩……ということとはまだ帰らせてもらえないの……?  
でも少しでも休めるなら休みたい。

これ以上はもう耐えられない……

「おっと! 言つとくがお前には休憩なんてねーからな!」

「……え……!?!」

「休めると思って期待してんじゃねーぞ! 甘ったれんな!」

突然、男達が私に襲いかかる。

「きゃっ!……やっ……な……何……!?!」

私の体は無理矢理押さえつけられ両手を縄で縛られる。  
そして近くの木に両手を吊るされてしまった。

「ハア……ハア……ハア……ハア……!」

私……これから何をされるの……?!







「ああっ…あぁああっ…!!ハア…ハア…ハア…んっ…あぁあっ!」  
体は快楽に波打ち愛液が滴り落ちる。  
辺りにはただただバイブ音と私の喘ぎ声が響いているだけ。

裸で両手を吊るされ一人不様に悶えているこの状況は  
酷く羞恥心を煽られる。









また時間が経ち、私の体は更に快楽に乱れる。

「あぁっ…ハアハア…んんっ…あっ!!…ハアハアハアハア…あぁっ!!」  
苦しいほど息が荒くなり胸を大きく上下させ腰がビクビクと震える。

オ…

オ…

ビク

オ…

オ…

オ…

オ…

オ…

オ…

オ…

オ…

オ…

この責め苦はさらさらと続くの……

オ…



執拗な快樂と恥辱は私の精神を確実にすり減らしていく。  
このままだと私は……

ああ……

ああああ……!!

ビクビク

ア……

ガガガガガ

ビクビク

ホッ

ホッ



「んんっ……はあっ……ああっ……あっ……!」  
体が更に痙攣し、ますます息が苦しくなる。  
そして……

「ああんっ! ああっ……! ああっ……!!」  
強制的な快樂に耐えきれずイってしまった。











「ハア…ハア…イヤあ…もう下ろして…はあっ…ああっ！」  
一度イっても途切れることなく継続される快樂責めに  
体と心が悲鳴をあげている。  
もう耐えられない。気が狂いそう…



ハア  
ハア

ハア…

あ…!

ゴ  
ゴ

ゴ

ゴ  
ゴ

ゴ  
ゴ

ゴ

あ…

ゴ  
ゴ  
ゴ

あ…!

ゴ

ゴ

ゴ



「ああっ……！ハアハア……ああんっ！ハア……ハア……ハア……  
ああっ……ん……ああっ！」  
私がおんなにも悶え苦しんでいるのに男達は涼しい顔をして  
楽しんでる。  
「イヤあ……ハアハア……んんっ……もうやめて……ハアハア……」  
ここには私の味方なんて誰一人としていない。  
孤立感に苛まれながら快樂責めは続く。

ああんっ！

ああっ

ああ

ぐわ

ぐわ

ぐわぐわぐわ

ぐわ

ぐわ

イヤあ！！

ああ

ああ









「ハア…ハア…ああ…あ…」  
立て続けにイカされ体力的にも精神的にも憔悴しきっている。  
私の体は力をなくし、両手を吊るす縄によって  
かろうじて支えられているだけだった。

ポア

ポア

おおお…

う…

ハア

ハア

ハア

ハア

ハア

ハア

ハア

ハア

ハア

ハア

そして度重なる股間への刺激により尿道が緩くなり  
徐々に尿意を催してきた。



「ん…んん…あっ…」  
ダメ…。今こんな所でするなんて…。  
だけど堪える間もなく私はオシッコを漏らしてしまおう。  
「あ…はあっ…あ…くっ…ああ…」  
溜まっていたオシッコはジヨロジヨロと音を立てながら  
地面に垂れ流される。

あ…あ…!

ん…

ゴッ

ハッ  
ハッ

ゴッゴッゴッゴッ

ゴッゴッゴッ

ゴッ  
ゴッ

ハッ

ゴッ

「ぎゃははっ!! 見るよ! こいつ小便漏らしやがったぜ!」  
「みっともねーなあ! その歳でお漏らししちまうなんてよお!」  
「お前もうずつとオムツでもしてるや! はははははっ!!」  
「う…くっ…うう…」  
悔しくて、情けなくて、私はただその場で咽び泣いた。







あれから暫くしてピンクローターと電マを外され  
ようやく快樂責めの苦痛から解放された。  
だけど両手はまだ縄で吊るされたまま……

男が目の前に立ちニタニタと不穩な笑みを浮かべながら  
私の体を見ている。

一体これから何をされるの……？  
怖い……





ドスツ!!

「うううううう...!!」

不意に男が私のお腹を思いっきり殴った。  
拳はお腹に深くめり込み、体はくの字に折れ、息が止まる。  
強烈な痛みと苦しみが私を襲う。

ドスツ!!

ドスツ!!





「かはっ……!あ……え……はあっ……ハア、ハア、ハア、ハア、ハア……」  
苦しむ……

両手を吊るされていいるから、うずくまることもできない。

「おいおい!喧嘩はクソ強えークセに腹パン一発で

死にそうな顔してんじやねーか!はははっ!」

「よっしゃ!次はオレの番だな!言っとなつけど俺等みんな

ジムで鍛えてっからかなりキツイぞ?」

ハアッ

ハアッ

ケホッ

ガク

オエ……

ケホッ

ガク

ハアッ

ハアッ

「ハア、ハア、ハア……そ……そ……そんな……待って……  
本当に……本当に苦しい……ハア、ハア……やめて……」

私は泣きながら男に懇願する。



ドツ!!

「ああああっつっ……!!」

私の願いは聞き入れられるはずもなくまたお腹を殴られる。  
男の拳は下腹部に突き刺さり、激しい痛みを私に与える。

ああああっ!!

ドツ





「はあっ……! はあっ……ケホッ、ケホッ……ハアッ……ハアッ……ハアッ……」  
ダメ……本当に無理。

こんな何発も食らったらひとたまりもない。  
助けて……誰か助けて……

「ははっ! まだまだ! もっと痛めつけてやんねーとなあ!」  
「はっ……はあっ……ハアッ……待っ……て……はあっ……はあっ……」

う……う……

ハアッ

ハアッ

ハアッ

ハアッ

ハアッ

ハアッ









ズドオツ!!

「ああっつっつっつ……!!!」

間髪入れず今度は脇腹を殴られる。

突き刺すような激痛……

そこはちようど肝臓、急所の部分。

痛い：痛い……

ズドオツオツ

ああっつっつ!!





ドポオツ!!

『アツアツアツアツ……!!』

今度はみぞおちに……

一瞬、意識が飛ぶ。

息ができない……苦し……

ズズズズ!!

ゴキゲン





「……っはあっ！かはあっ！……うう……はあっ……はっ……はあっ……！」

地獄のような痛みと苦しみ……

息ができないし意識が朦朧とする。

これ以上お腹を殴られると本当に死んじゃう……

「ふははっ！どうよ俺のパンチは！ボクシングやってたから

パンチには自信あんだぜ！」

「んじゃ次は俺の番だな！俺もパンチ力なら負けねーぞ！」

ゲホッ

あ……

ハッ

ハッ

ガク

うう……



ハッ

ガク

ゲホッ

ハッ

ハッ

「はあっ……はあっ……もう……ゆるして……けほっ……げほっ……

本当に……死んじゃう……はあっ……はあっ……はあっ……」

「甘ったれんな！俺達全員の腹パン食らうまで終わんねーぞ！」

「うぐ……うう……そんな……はあっ……はあっ……」

お願い……誰か助けて……



この後も私は何度もお腹を殴られ続けた。  
どれだけ必死に懇願しても泣き叫んでもやめてはくれない。  
2、3回気を失ったけど水をかけられたりして無理矢理起こされ  
また殴られた。  
男は苦痛に悶える私を見て嘲笑い楽しんでいるようだった。  
私にとってそれは地獄のような時間……

ハアッ

あー！

ガク  
ガク

ハアッ

ガク

アッ

ハアッ

ハアッ

う……う……

胃の中の物を吐き出してしましてお腹の激痛と苦しみが治まらない。  
体と心がズタズタに壊され削がれていく。



「オラあつ！いつまで寝てんだ！起きろ！」

「ああつ…!!!」

男は私の髪を掴み無理矢理起こすと裸絞めで私の首を絞めあげる。

あ…あ…

グググ

…

「あ…ぐ…あ…ああつ…」

「オラオラ！このまま絞め殺してやろうか？はははっ！」

「う…あ…た…助…け…て…」

男の腕は私の首にガツチリと嵌って逃れられない。



『あ……かはっ……あ……あ……あ……』  
挿っ……挿っ……挿っ……

女……  
ああ……

ググ……

ガク

ガク

殴られたお腹の痛みと相俟って本当に辛い。  
徐々に意識が遠のき気絶する寸前まで追い込まれる。









「まだまだだあ！」

「ああっ！……え……あ……んくっ……ああ……」

「!?」

まゆ

ああ……

ん……

ビクッ

男は再び私の首を絞め上げる。













「おいーもつと肉便器らしい姿にしてやるぜー!」  
男はズボンのポケットから取り出した油性マジックで  
私の体に落書きをし始めた。

ハァ  
んっ

ハァ

ああ...

ビョ

グッ  
グッ

オ  
オ

「ん...ああっ...い...痛い...ハァ...ハァ...」

マジックを強く押し付けるように書かれているから

肌を傷つけて物凄く痛い。

「動くな!上手く書けねーだろうが!」

「ぎゃあっ!」

体によじらせる私を責めるように乳首を思いきり抓られた。

抵抗することは許されない。



「肉便・器、どうだ！お前にピッタリじゃねーか！」  
「ギャハハハ！良いねえ！次は『奴隷』って書いてやろうぜ！」  
「あと『レイプ願望あり』ってえのものな！」

「あー…」

「…」

ハア  
ハア

まっ

ググ…

奴隷  
レイプ願望あり

ビクッ

「OK！他にリクエストはねえか？」  
「う…く…あっ…ハア…ハア…やめて…」

私の体はまるで物のように扱われ  
次々に屈辱的な言葉を書かれていく。

ビクッ











私は公衆トイレの男子トイレの中に連れ込まれ  
ガムテープで両手首を拘束された。

「オラー！奉仕活動として人間様の便器を舌で舐めて綺麗にしろ！」  
「ハアッ…ハアッ…ま…待つて…そんな…」

ガク

ハア

ハア

ガク

イヤぁ…!!

ヤあ…!!

ハア…  
ハア…

「さつさと舐めろや！肉便器が人間様と  
同じ扱いをしてもらえると思うなよ！」

「イヤあつ…!!」

男は嫌がる私の髪を掴み便器に顔を押し付ける。

便器を舐めるなんて、そんな汚いことできるわけがない…



「焦れっつてーなあ!!ならこれだ!!」  
「ん…あ…あっ…!!」

ズプ…

グググ…

ビク

ハア

ハア

ビクッ

あ…あ…

あ…

ハア

ハア…

躊躇う私に苛立った男が私のアソコに大きなバイブを挿し込んだ。  
「ん…あ…あっ…ハア…ハア…あ…あ…」  
強く振動するバイブが私の膈内で激しくうねる。



「こっちの穴もだ！」  
「イヤああっ……!!」

今度はお尻の穴にアナルバイブを強引に挿入される。

グー...

グググ...

ビュッ

ハアッ  
ハアッ

ビュッ

イヤあ!!

ハア  
ハア

さっきお尻の穴を犯された時に肛門が裂けてしまっているから  
物凄く痛い。

「はあっ……はあっ……あつ……痛……い……ああつ……!!」

2つの穴を同時に責められ酷い苦痛と快楽に苛まれる。











「おい！ちゃんと舌出して便器ペロペロ舐めてたか？  
舐めてねーだろ！ならもう一回だ!!」

「イヤああっ……!!」

バシヤア……!!

「オラオラ！舐めろ！ちゃんと舐めるまでやめねーぞ！」

グググ

ゴッ

グググ

ズズ

バシヤア

ビクビク

ビクビク

バシヤア

……!!

……!!

「……っっっ!!」

お尻のアナルバイブを足で更に奥まで押し込まれ激痛が走る。

「……!!? ……っっっ!! ……っっ!!」

痛い、苦しい……

私は便器に顔を押し付けられながらただひたすらもがき苦しむ。



ザパアッ……!!

「っはあっっ!!はあっ!!はあっ!!うえっ…げほっ!げほっ!  
ハアっ…ハアッ…ハア…うう…」

グ…

グググ

ポッ  
ポッ

「はははっ!どうだ苦しいか!お前が素直に便器舐めときゃ  
こんな目にあわずに済んだのによお!バカな女だぜ!」

ガク

お前が素直に便器舐めときゃ  
こんな目にあわずに済んだのによお!

ガク

ガク

はあ!!

はあ!!

ザッ

ゲホッ  
ゲホッ

お…スネ…

私の自尊心がズタズタに傷つけられる。  
まるで自分がどこまでも堕ちていくような感覚…

「オラあ!もう「下」!」

「ああっっ…!!」

この後も私は気を失いそうなほど何度も便器に押し付けられた…



「もっとしっっかりしゃぶれや！便器女が！」

「んんっ!!!んむう...んぷっ...んっ!!!」

「犯されすぎてマミンゴ緩くなってんじやねーかの...もっと締めろやコラ！」

ちびっく

んんっ!!!

んんっ!!!

んんっ!!!

んんっ!!!

んんっ!!!

んんっ!!!

SEX 便器

願望

私

ズッ

ズッ

男達は更に追い打ちをかけるようにズタボロの私をレイプする。体の痣が増えていき朦朧とした意識の中、鮮明な痛みと苦しみが私の体と心を容赦なく苛んでいった。



男は更に激しく私のアソコを突く。

「んっ!!んらう…んぶっ…!!んんんんっ!!」

ジューッ  
ジューッ

んっ!!

んっ!!

んっ!!

ちゅっ

んっ!!

SEX

女便器

願望

ズブッ 私

ズブッ

「おい!!もつとマンコ締めて気持ち良くさせろやメスブタが!

お前なんて性欲処理しか存在価値ねーんだからよお!!」

あまりにも理不尽な扱いに心が折れる。

私はもう取り返しがつかないほど汚されてしまったのかもしれない…











「ぶはあっっ!!はあっ!!げほっ!!げほっ!!おえっ!!げほっ!!」  
「ハアっ...ハア...ハア...ハア...ハア...ハア...」

口の中に出された大量の精液は飲みきれずに吐き出してしまった。

苦しい...気持ち悪い...

ヌロ...  
ヌロ...

ヌロ...

ヌロ...

ハアッ  
ハアッ

ゲホッ  
ゲホッ

ほあっ!!

ガク

SEX  
肉便器

ガク

願望

私  
トロ...

「オイッ!!テメー何吐き出してんだコラあっ!!」  
「バシイイン!!」

「きやあっっ!!」

男は逆上し私の頬を思いつきりひっぱたく。

「全部飲めっつったよなあ!肉便器のクセに俺の言うことが聞けねーのかテメー!!」

「ごめんなさい...!ごめんなさい...!!」

「聞き分けのねえ肉便器にはお仕置きが必要だな!覚悟しろよ!!」

「そんな...イヤ...イヤ...許して...お願い...もうイヤあっ!!」



エスカレートする男達の残虐な行為。

私は気が狂いそうなほど暴力的にレイプされ痛めつけられる。

「オラァっ!!このアマぁー!自分が肉便器だっってことを自覚しろやー!」  
「きゃあぁっ!!」

胸に痣ができるほど乱暴に揉まれ、乳首が引きちぎれそうなほど強く噛まれ、クリトリスを振り上げられ……

「お前が従順な性奴隷になるまで痛めつけてやるぜ!」  
「あああっ……!!イヤ……あっ……痛……い……ハァっ……ハァっ……ああっ!!」  
「はははっ!!いいぞ!もつと不様に泣き叫べ!」

それだけでは飽き足らず頬や頭を思いきり叩かれたりお腹や背中を蹴飛ばされたりもした。

「オラオラぁ!!まだ終わんねーぞ!」  
「イヤあぁっ!!ハァっ……ハァっ……うう……もう許し……て……はあっ……はあ……あっ……きゃあぁっ!!」

そして私のアツコ、お尻の穴、回……穴という穴を何度も犯され大量の精液を注ぎ込まれた。

いつまでも終わらない過酷な痛みと苦しみ……

公衆トイレの中に私の泣き叫ぶ声と男達の怒号が響き続ける……



……いつたいていどれくらい時間が経ったのだろうか……  
いつ終わるかも分からない私へのレイプと暴力は  
気が遠くなるほど長く感じられた。

何回犯されたのかも覚えていない……ただ大量の精液が  
私のアソコやお尻の穴から溢れ出している。

男達は満足したのか、私はまるでゴミのようにトイレの床に  
放り捨てられた。



裸だから固く冷たい床と冷えた空気の  
感触が肌に直接伝わってくる。

身体中が痛いし私にはもう指一本さえ  
動かす余裕がないほど消耗しきっていた。



「はははっ!!なんて無様な姿だ!まるでポロ雑巾じゃねーか!」  
「コイツは俺らの玩具だから何やってもいいんだぜ!最高だな!」  
薄れゆく意識の中、男達が好き勝手に酷いことを  
言っているのが聞こえる。  
「今日もお前が犯されているところ全部撮影しといてやったからよお!  
また野郎どものオナネタにしてもらえるな!良かったな!はははっ!」  
男達の罵詈雑言の聲が私の心に追い打ちをかけ  
また涙が溢れ出てきた。

自分がひたすら惨めすぎて...情けなくて...悔しくて...  
どうして私がこんな目に遭わなくちゃいけないの...  
どうして...





「はははは！どうだ？今の気分は」

男が私を見下ろし話しかけてくる  
全ての元凶であり私を貶めた男……

「こんなところで裸にされて、レイプされて、腹殴られて、  
体に落書きさされて、おまけに便器に顔突っ込まれたりしてよお」

「こんな不様で汚ねえ姿をお前の家族やお友達が見たらどうなるかな？  
自分のお姉ちゃんが肉便器だと知ったらどう思うかな？」

やめて、もう何も言わないで



「所詮お前は誰かに愛される資格なんてねーんだよ！」

何やつても報われることなく誰にも理解されず嫌われ疎外されるだけ。」

分かってる……そんなことは分かっている

「目の目を見ることなんて永遠にねえ！」

もう神様にも見放されちまつてるかもなあ！ははははっ！」

人に憎まれるなんてもう慣れていると思っていた……でも……



「だからお前はこうやって光の届かない場所で地面に這いつくばって惨めに生きていくしかかねーんだよ！肉便器としてな！」

「いいか？これは罰だ！」

罰……？

「日の当たる場所でのうのうと生きているお前への罰だよ！  
そこにお前の居場所なんてねーんだ！」

そんな……理不尽すぎる

「覚悟しとけよ！お前の地獄は始まったばかりなんだからなあ！  
ハーハッハッハッハッハッ！！」

もうイヤ……誰か……助けて……



しばらくの間、私は嗚咽を漏らしして泣いた。

心が修復できないうほど折れてしまっていた。

男達は各々に捨てて台詞を吐きながら私を公衆トイレに置き去りにして帰っていった。

公衆トイレの中にはただ私の鳴き声だけが響く……



「ハア…ハア…ハア…ハア…ハア…」

あの後しばらくしてなんとか動けるようになり、私は消耗しきった体を引きずるようにして公衆トイレを出た。

ガク

裸のまま…しかもあんなボロボロの状態で家まで

帰るわけにもいかないから服を脱いで置いていた場所に取りにいったけどそこには無かった。

公園内を少し探してみると私の服と下着はゴミ箱に捨てられていた。酷い…

私はゴミ箱から拾い上げた自分の服と下着を着て満身創痍になりながら公園を後にした。

ハア

ハア

ガク  
ヨロ…

ハア

ハア

そして今は家に帰る道中…決して近くはない距離をフラフラと体を引きずるようにして歩いている。



殴られたお腹が痛すぎて立っただけでも辛い。  
それにアソコとお尻の穴が擦り切れていて歩いたたびに痛みが走る。

ずっと吐き気が止まらないし酷い頭痛がする。

道端で何度か吐いてしまった。ごめんなさい……

早く帰りたい……早く帰って安心したい……

だけど足取りはあまりにも重くなかなか前へ進めない。

どうしてこんなことか……

もう疲れた……

ハア  
ハア

ハア

ガク

ガク

ハア……

ハア……





あれから私は憔悴しながらも少しずつ歩き続けようやく自分の家に辿り着いた。

深夜遅い時間だから幸い家族たちは寝静まってるので私が帰ってきたことに誰も気づいていない。

こんなズタボロの姿を家族には見せられない。

私はすぐさまお風呂場に入りボディソープとシャワーで身体中の汚れ……汗、泥、そして男達の精液を洗い流す。

でも油性マジックで書かれた体の落書きは中々消えずに残っている。

『消えない……消えない……』

私は泣きべそをかきながらボディソープで泡立ったスポンジでひたすら体を擦り続けた。

鏡に映った私……

酷い姿をしている。

体中痣だらけで顔はやつれて目の下に酷いクマができています。

どうしよう……

明日みんなになんて言っつて誤魔化そう……

みんなの前でちゃんと笑顔を作れるかな……？



— 続 —  
く





























































































































































































































































































































































ア-111#

SEX

便利器

好球

ア-111

ママの嫁だ！

ママの嫁だ！

































SEX

肉便器

女暴

A-1/3

随心所欲

私

出





出

肉便器

SEX

A-1/3

随心所欲

私





SEX

肉便器

A-1/3

随心所欲

私生活

出





ア-1/3

肉便器

女子

SEX

ア-1/3

随刻

私





SEX

肉便器

願望刻

私

出





SEX

肉便器

器

私





SEX

アジメ

肉便器

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ

おまんこ



















